

# 肩の力を抜いて、一歩ずつ

大東文化大学 渡辺 恵津子

希望と不安を胸に4月から教壇に立った新任教師のみなさんは、木々の緑が濃くなつたのも、ツバメが巣作りを始めたのも目に入るところではない緊張の忙しい毎日を、夢中で走り抜けてきたのではないかと思ひます。教材研究・教室経営は勿論の事、山のような書類書きや「丸つけ」「赤ペン入れ」に追われて、勤務時間が過ぎて帰宅できずに、休日も学校に出かけなければならぬような生活だったのではありませんか。ペテランの教師でさえ、新学期は多忙な毎日。先の見通しが持てない新任教師が大変であることは、想像に難くありません。子どもや教材の事、親との事、同僚や先輩教師との事、新任研のこと、管理職からの「指導」の事等々……。心休まる暇もなかったと思ひます。本採用の新任教師はそれでも「指導？」がありますが、臨時

採用で新任の人たちはもつと苦勞したのではないかと思ひます。ここで、目先の忙しさに目を奪われな

いで、ちよつと立ち止まって考える3つのポイントを提案したいと思ひます。その一つは「教育とは一人ひとりの持ち味を引き出すこと」の原点から出発しようということ。2つ目は、「よく支配される人間にならない」ということ。3つ目は、子どもや親、仲間と「共に」ということです。

## 教育の仕事は「コミュニケーション労働」

新しい子どもたちとの出会いの中で、「気になる子」や子どもたちとの関係・親との関係がうまくいかずに悩みを抱え

ているのは、経験の浅い教師ばかりではありません。

管理職から「子どもの姿勢がよくない」「静かに話を聞いていない」と指摘されて学級経営に悩んでいた先生がいまいた。この4年生の教室には、自分の意にそぐわない事があると暴力を振う子がいて全体が落ち着かなかつたのです。子どもとの関係がうまくいかぬまま夏休みを迎えることになりました。

「学校を離れての新任研は解放された気分ではつとしたし、同じ悩みを抱えた人もいたので、おしゃべりできて気分転換になった。」と語る彼女でしたが、大変さから一時的に離れてはつとしたとしても、何も解決しなかつたばかりか、「子どもとの関係は、ますますうまくいかなかつた」と言ひます。その彼女が、民間の教育研究集会での学びとの出会いで変わ

りました。学級の実態を分析し、2学期からの学級づくりの柱を考え実践したのです。子どもたち同士の関係を育てることを中心に、「怒鳴って怒るのではなく、子どもと丁寧に関わりながら信頼関係をつくり、楽しい授業をつくる」「子どもといっしょに必要なルールを決める」「体を使って遊び、みんなで活動をする」と方針を立てて迎えた2学期、教室は少しずつ落ち着きを見せ始めたそうです。

彼女の「子どもの見方」が変わりました。子どもたちを自分の思い通りにするために押し付けるのではなく、子どもを信じて寄り添い、信頼関係を創りながら「意欲を引き出すにはどうしたらよいのか」を考えるようになったのです。はじめは戸惑っていた子どもたちも、想像、発見をしながら考える授業を楽しみ、中心になって騒いでいた子の姿勢が少し変化してきたこともあって、教室全体が落ち着きを見せるようになってきたと言えます。

教師一人の力で何とかしようと思ってもうまくいかないのが「教育」です。子どもたちは仲間や文化（授業を含む）との出会いの中で、自らの力で育っていくからです。

「本来教育というものは一人ひとりの『持ち味を引き出す』ということを助ける目的がある」（『はらべこあおむし』と学習権） 太田堯 一ツ橋書房）のです。今、この原点に立ち戻って考えることが大切です。私たちの仕事は福祉や医療と同じように、相手の思いや願いを聴くことなしに成り立たない「コミュニケーション労働」です。子どもたちや親たちが置かれている社会的な背景も読み取りながら、子どもが主人公であることを柱にしていく事が必要になってくるのです。

## したたかさど、しなやかさを

以前、夏休みに埼玉県の5年次研修の講師をしたことがあります。参加者の男性教員は真夏の暑い日にも関わらず、長袖のスーツにネクタイ、女性もみんな黒いスーツでした。指導課の人が「みなさん上着を脱いでください」と言われるまで、みんな汗を流しながらしつかりスーツを着込んでいました。「言われるがまま」なのは服装ばかりではありません

でした。実践的な算数の講義を2時間したのですが、「教科書の数字を変えていいのですか」「線分図以外の物を使っていいのですか」と信じられないような質問も飛び出しました。講義後は持っていた沢山の教具を写真に収めていましたが、その従順さには驚きました。

服装の事では新任の先生から相談を受けたことがあります。新任は暗黙の内に、みんな黒のスーツを着て通勤しています。朝体育着に着替えても、朝会があるとスーツに着替え、体育で着替えて終わるとまた黒のスーツです。（Tシャツで授業することを禁じられている学校もあるとか）勿論校外学習も……。そんな中、彼女は低学年の担任にもなったので、淡いきれいな色のジャケットを着て通勤したところ、ベテランの先生たちから

「春らしくていい色ね。素敵よ」と声をかけてもらったのに、少し年上の先輩から声をかけられて助言されたそうです。

「あなたはまだ条件付き採用期間だから、黒のスーツがいいわよ。」と。こんな時、皆さんはどうしますか？ 私たちは子どもたちの前に立つにあたり、どんな服装でいるべきかを考えるこ



とができる大人です。服装は、その人自身が決めることではないかと思っただけです。装いは自分らしさの表現ですから、好意があっても「黒に」という助言には、「大きなお世話」と言いたいところですが、同僚性も大切なことは確かです。彼女に聞いてみると、「ベテランは誰も黒いスーツを着ていない。着ているのは経験の浅い教員。」とのことでした。なぜ若い人なのでしょう。

「初めは助言通りにしながら、少しずつ自分らしくしていったらどうかかな」と私見は述べましたが腑に落ちません。

管理職の中にはベテランと若者を区別して、とりわけ若い教員に「指導」と言っ保つために若者に強く言のではないかと思ひます。こうした職場では、他の仲間も様々な不満を抱えていますから、自分の思いを飲み込まずに相談しながら、したたかさとしなやかさを持つてやっつけていきましょう。「言われるがままに」「空気を読んで」では、弱い立場の新任教師たちは大変です。「よく支配される教師」であつては、自分でものを考える子どもを育てることはできません。自分を大事にすることと、子どもを大事にすること

は一体であることを考えたいと思ひます。

## 自分のしんどさを語る 大切さ

教師になる人の多くは「よい子」であつた経験を持っています。言われたことはきちんとなして、一生懸命に頑張つて成果を取めた自分の経験から、何でも一人で頑張つてしまう傾向にあるのではないかと思ひます。

「休日も学区地域の活動に参加」「熱があるけど頑張つて出勤した」「万年寝不足」こんな頑張り屋の先生たちに追い打ちをかけるように、今は親からの苦情も少なくないことでしょう。「懇談会は苦手」という若い人も多くいますが、親と手をつなぐことで豊かになることもたくさんあります。今すぐには無理かもしれませんが、親たちの言動の裏にある願いにも子どもと同じように耳を傾けてみましょう。困つたこと、「しんどい」は飲み込まずに仲間や親たちとも語り合うことです。同じような悩みを持つ仲間と聞きあい喋り合ひましょう。同じような

悩みを持つていることに共感してくれる仲間がいるだけで元氣になれます。それが組合です。仲間ができて元氣になった若い先生を今まで何人も見てきました。そして、疲れた時は休む勇氣も必要です。自分を大事にしましょう。先生の代わりはたくさんいますが、自分の人生の代わりはいいのですから。

子どもたちは、先生の笑顔が大好きです。わかつていても忙しい毎日の中、「笑顔でばかりはいられない」と言われるかもしれません。しかし、ここでもう一度「子どもたちの前に笑顔で立つ」ために、ゆつくりと深呼吸してみてください。肩がほぐれて明日への希望が見えてくるはずですよ。